

『あの日約束』

（「獣人遊郭」

くナンバー1花魁 “銀狼” の独占欲丸出し濃厚発情えっち
【初恋×嫉妬執着×相愛SEX】特典SSく）



空の色が藍にかわる頃、きばわらおおもん牙原大門の木灯籠きどうろうに、橙色の灯りがともる。

牙原遊郭の幕開けた。

大門から続く大通り、道沿いに軒を連ねる茶屋、揚屋の店先の辻行灯に火が入り、にわかに騒々しく、人々が行きかい、声が飛び、鳴り物が鳴り始める。

ここは、この世で爪弾きにされる獣人の、男だけが働くことの許される場所。牙原名物の薔薇が咲き乱れる、この華やかな通りのあちこちで、多額の銭が飛び交い、客の女は、ケモノ男と一夜の夢を買う。



銀太は幼馴染の少女の顔をじっと見つめた。

幼いころからいつも一緒に遊んでいた。だから、少女の兄から言われた言葉は、銀太にとって思いもよらないものだった。

「なあ…あのさ…俺、言ったんだ。お前の兄さんに。大きくなったら、お前を嫁にもらいたいんだって。

…そうしたら、駄目だって。

…お前の兄さん、困った顔してた」

なんて、と少女は銀太に問うた。

「…なんでって…俺も…、

俺も、何でだって思うよ！

でも、俺は獣人だ。…お前は、人間で…

しかも、貧しいって言うけど武家の子じゃないか。

身分が違うって…、どうしようもないんだって…ッ」

銀太の剣幕と、言葉から伝わってくる怒りや困惑以上の銀太の悲しみに触れ、

ぽろぽろと少女の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

「な…泣くなよ、

ほら、俺の耳、触っていいから！

好きなんだろ？俺の耳。

…まだ小さいけど、大きくなったら、もっともふもふの毛になって、触り心地も良くなるんだ。

お前になら、大きくなっても触らせてやるから…、

一緒に、なれなくても…」

遠慮がちに銀太の耳を触りながら、それでも少女の涙は止まらなかった。銀太は無理に明るい声を出して言った。なんとか、少女に泣き止んでほしかった。

「…そ、そうだ、牙原って知ってるか？

薔薇がいっぱい咲いてて綺麗な通り。

俺みたいな獣人がたくさん働いてるところなんだって。

あの、桜が綺麗な吉原と一緒に、

でっかい大門通るのには金がかかるけど、

牙原は抜け道があって、子供なら通れるって。

今の時期は、薔薇が盛りだろ？

この時期だと、昼間でも花魁道中っていうの、やってるんだって。

すごい綺麗だって言ってたから、見に行こうよ」

うなずく少女の手をしっかりと握り、銀太は駆け出した。



大通りからは死角となった塀の、ごく小さな穴をくぐり抜けると、にわかに喧騒が大きくなった。

人々のさざめき、鳴り物の音、まるで祭りのような賑わいだ。

その喧騒が、いっそう大きい方へと足を進める。銀太は少女の手を、ぎゅっと強く握った。

そして角を曲がった途端、それは目に飛び込んできた。

「う……わあ……すごい……」

あれが、花魁道中っていうんだ……！

いろんな色が……飛び散って……」

少女は、驚きのあまりしばし声を失っていた。

目の前を歩くあでやかな着物をまとった狼獣人から目を離せず、綺麗……、なんて素敵……それに格好いい……、思わずこぼれ落ちた少女のつぶやきを、銀太は聞き逃さなかった。

少女が口にした憧れの言葉は、そのまま銀太の希望になった。

「…うん、綺麗だな…、

お前も…憧れる？

うん、確かに…すごく、格好いい」

目をきらきらと輝かせている少女から、花魁道中を練る狼獣人に目を移し、ささやくように銀太は言った。

「なあ、あのさ。

…牙原の花魁は、滅多になれるもんじゃないんだって。

すごく大変で、頭もよくないといけないし…でも、

なれば一国の主を超える程の金子きんすが手に入るって…」

とつとつと語る銀太の方を、ゆっくりと少女が見た。銀太もまた、少女の目をしっ

かりと見据えた。

「…なあ。俺、…牙原に行くよ。

それで、ただの花魁じゃない、牙原一の花魁になる。

お前に最高の花魁道中を見せてやる。

牙原一になれば…獣人でも、たくさんの金子を手にして、成り上がれるはずだ。

そうすれば、お前の兄さんも、親父さんも、

俺を、認めてくれるかもしれない。

お前と…ずっとずっと、一緒にいられるかもしれない」

「…俺、牙原一の花魁になって、必ずお前を迎えに行く。だから…待ってて」

(了)

